

平城宮第一次大極殿院磚積擁壁の平面形について

はじめに 平城宮第一次大極殿院は古代の宮城の大極殿院の中で最も大きな規模（東西500大尺、南北900大尺）を持つ。これをさらに特徴づける施設が、大極殿が立地し南門から600大尺の位置で立ち上がる高台（約2m）と、そこへ南の広場側から登る屈曲した平面形をもつ東西2つの斜路である。高台前面および斜路側面の擁壁は長方磚を約70度の傾斜で積んで化粧しており、この部分を磚積擁壁と呼んでいる。この遺構の平面形を検討するため、各点の位置の計測は最下段の前面とし、未検出の屈曲点は挟む二辺の延長部交点とした。関連遺構の位置を表8（X.Y座標は国土方眼座標系第Ⅵ系に基づく）に、各部のなす角度と距離を図48にそれぞれ記した。ただし、東斜路起点の遺構は削平されており、さらに南まで延びていたものと思われる。

ひとつの解釈 高台前面（磚積壇）東西長を330尺（=275大尺、55尋）とし、斜路出隅部分は直角を挟んで、北側は3：4：5の直角三角形で南北長を30尺に、南側は正三角形を縦に二分した直角三角形で南北長を20尺にし、斜路全長は110尺で計画した可能性は考えられる。しかし、330尺とすると基準尺は0.2969mとなって、大極殿本体の0.2954mや既知の平城宮内の基準尺よりやや大きくなる。また、斜路各辺の長さは小尺でも大尺でも完数値は得られず、対になる部分の長さの差は2尺を超える。さらに、出隅の2種の直角三角形の角度はすべて2度近くの誤差をもつことになる。

このようにみると、磚積擁壁の施工実態は極めて粗雑ということになり、屈曲する形とその長さについて脈絡のある説明は困難である。

表8 第一次大極殿院磚積擁壁等座標値

場所	記号	X	Y	特記事項
⑥の200大尺北	⑥	-145,179.40	-18,589.94	中軸線上、南から800大尺
斜路出隅北辺延長部交点	K	-145,180.96	-18,590.53	
中軸線上のKの近似点	K1	-145,181.21	-18,590.04	Ⅱの0.49m東、0.25m南
中軸線上のKの近似点	K2	-145,181.68	-18,589.94	大極殿心の120尺北
⑥の100大尺北	⑦	-145,214.80	-18,589.94	中軸線上、南から700大尺
高御座心	T	-145,214.79	-18,589.94	
大極殿心	DC	-145,217.08	-18,589.94	
磚積壇中点	⑧	-145,250.20	-18,589.94	中軸線上、南から600大尺
磚積壇東端	E1	-145,250.16	-18,540.94	
磚積壇西端	W1	-145,250.24	-18,638.93	
東斜路出隅	E2	-145,258.90	-18,534.68	
西斜路出隅	W2	-145,259.40	-18,645.33	
東斜路入隅	E3	-145,264.75	-18,523.72	
西斜路入隅	W3	-145,265.62	-18,655.36	未検出
東斜路起点	E4	-145,280.78	-18,524.17	後の柱穴内での想定値
西斜路起点	W4	-145,282.43	-18,655.55	
北列宝篋遺構	BN	-145,278.50	-18,571.38	東から1つ目の柱穴心
井戸SE 7145	SE	-145,278.90	-18,546.60	

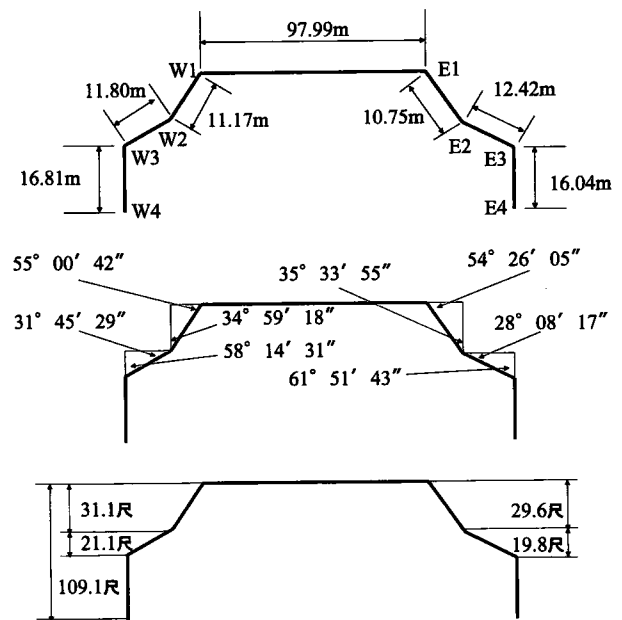


図48 磚積擁壁各部のなす角度と距離

基点からの計測と別の設計方法 粗雑にみえる施工実態の示すことは、E1あるいはW1などから各辺の長さや方向を測り施工したのではなく、やや離れた基準となる点（以下、基点）から磚積擁壁各点までの距離を測って位置を決め、その点同士を結んだ結果、対称部に大きめの誤差を生じたと考える方が自然だろう。こうして想定される基点は、斜路出隅の東西で対になる各2辺の延長部の交点や、その付近に想定される中軸線上の近似点、地割の基準となる点である。

各基点から磚積擁壁各点への距離の検討では、対称部の誤差を参考に、許容施工誤差を2.0尺あるいは1.7大尺

表9 基点から磚積擁壁各点までの距離

基点（記号）	遺構各点	距離（m）	距離（尺）	距離（大尺）	計画値尺	計画値大尺	40尺の倍数	30大尺の倍数
斜路出隅北辺（12）延長部交点（Ⅱ）	⑥	69.24	234.7	195.6				
	E1	85.13	288.6	240.5		240大尺		8
	W1	84.52	286.5	238.8		240大尺		8
	E2	95.88	325.0	270.5		270大尺		9
	W2	95.69	324.4	270.3		270大尺		9
	E3	107.16	363.3	302.7				
	W3	106.64	361.5	301.2		340大尺		
	E4	119.86	406.3	338.6	410尺	340大尺		
交点Ⅱの近似点（K1）	⑥	68.99	233.9	194.9				
	E1	84.65	286.9	239.1		240大尺		8
	W1	84.59	286.7	239.0		240大尺		8
	E2	95.4	323.4	268.5		270大尺		9
	W2	95.76	324.6	270.5		270大尺		9
	E3	106.66	361.6	301.3	360尺	300大尺		10
	W3	106.73	361.8	301.5	360尺	300大尺		10
	E4	119.39	404.7	337.3				
大極殿心の120尺北（K2）	⑥	68.57	232.4	193.7				
	E1	84.21	285.5	237.9				
	W1	84.26	285.6	238.0				
	E2	94.96	321.9	268.2				
	W2	95.44	323.5	269.6				
	E3	106.23	360.1	300.1	360尺	300大尺	9	10
	W3	106.42	360.7	300.6	360尺	300大尺	9	10
	E4	118.94	403.2	335.0				
磚積擁壁中点の100大尺北（⑦）	⑥	35.4	120.0	100.0				3
	E1	60.43	204.8	170.7		170大尺		
	W1	60.46	204.9	170.8		170大尺		
	E2	70.7	239.7	199.7	240尺	200大尺	6	
	W2	71.11	241.1	200.9	240尺	200大尺	6	
	E3	82.95	281.2	234.3	280尺		7	
	W3	82.84	280.6	234.0	280尺		7	
	E4	93.16	315.6	263.2				
大極殿心（DC）	⑥	33.12	112.3	93.6				
	E1	59.12	200.4	167.0	200尺		5	
	W1	59.16	200.5	167.1	200尺		5	
	E2	69.3	234.9	195.8				
	W2	69.71	236.3	196.9				
	E3	81.59	276.6	230.5		230大尺		
	W3	81.43	276.0	230.0		230大尺		
	E4	91.56	310.4	258.6		260大尺		
	W4	92.6	313.9	261.6		260大尺		

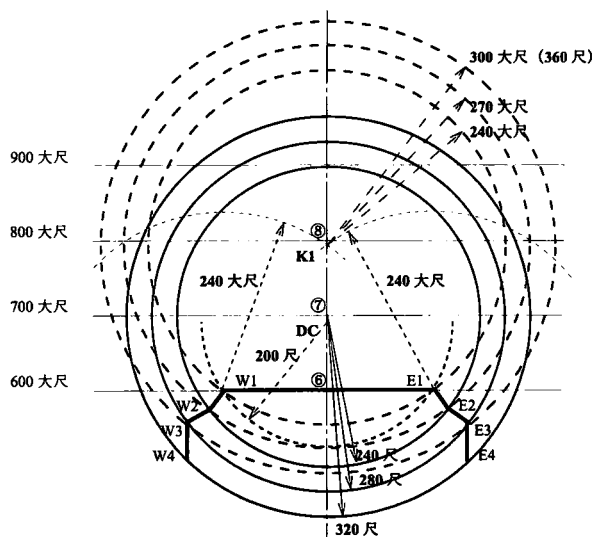


図49 設計案A

までとした。表9に各基点と磚積擁壁各点間の距離、それを0.295で除した尺長、0.354で除した大尺での尺長をそれぞれ記した。また、その尺長が許容施工誤差内で完数値を得る場合に下線を付し、対称部の長さも同様であった場合には計画値として用いた可能性があるとして、その数値を次列に記した。さらに、それが小尺なら40尺の、大尺なら30大尺の何倍であるかを最後に記した。なお、各基点とE4との距離についてはE4検出状況から、W4までの尺長に下線を付すことができればそれを計画値と解することにした。

1 基点から用いる尺度は小尺か大尺のいずれか一方であるという想定や40尺あるいは30大尺の整数倍を計画に用いた可能性があること等を加味して検討した結果、磚積擁壁各点の位置を決める二つの設計案を考え得た。

設計案A (図49)

【手順1】大極殿心から半径200尺(40尺×5)の円を描き、600/900基線との交点をE1・W1とする。

【手順2】E1とW1から北側へ240大尺(30大尺×8)の距離の点K1を求め、K1から270大尺(30大尺×9)で円を描く。一方、中軸線と700/900基線との交点⑦からは240尺(40尺×6)で円を描き、それら2円の交点をE2・W2とする。

【手順3】同様にK1から300大尺(30大尺×10)、⑦から280尺(40尺×7)の円を描き、2円の交点をE3・W3とする。

【手順4】⑦から320尺(40尺×8)の円と、E3・W3を通る南北線との交点をE4・W4とする。

設計案B (図50)

【手順1】大極殿心から半径200尺(40尺×5)の円を描き、600/900基線との交点をE1・W1とする。

【手順2】大極殿心の北120尺にK2を設ける。

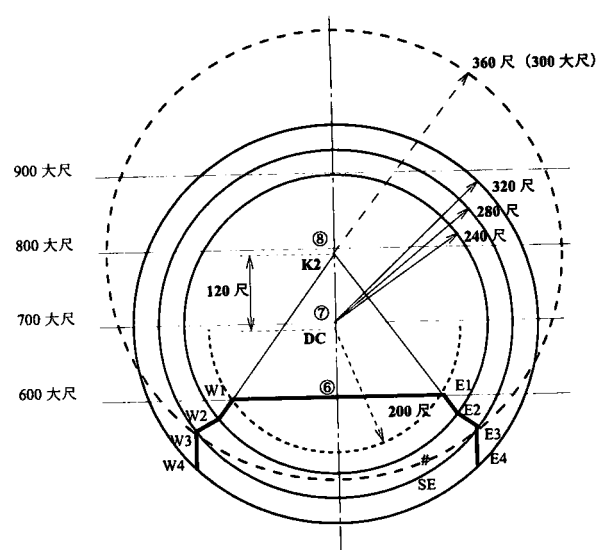


図50 設計案B

【手順3】K2とE1・W1を結ぶ南への延長と、⑦から240尺(40尺×6)の円の交点をE2・W2とする。

【手順4】K2から300大尺(30大尺×10)〔360尺(40尺×9)〕、⑦から280尺(40尺×7)の円を描き、2円の交点をE3・W3とする。

【手順5】設計案Aの手順4に同じ。

大極殿院における大極殿の配置 藤原宮、平城宮第一次・第二次、難波宮の各大極殿院で大極殿の位置をみると、東西方向の基準となる軸線(南北の分割線等)は、大極殿心のやや北側を通ることが指摘できる(飛鳥浄御原宮エビノコ郭と大殿の関係も同様)。第一次大極殿院の場合は南から700大尺の東西軸が大極殿心の約8尺北で、この東西軸と中軸線との交点⑦は、磚積擁壁の平面形に関わる等差の同心3円の中心であり、大極殿の南廂を除いた北3間分の中心(T)にほぼ一致する。この点こそ高御座心であろう。不規則にさえ見える大極殿院における大極殿の配置は、大極殿身舎のやや北寄りに高御座心を決め、これを東西軸線上に一致するように定めた結果とみたい。平城宮第二次大極殿院下層遺構では、内郭の北寄り1/3に大安殿ともされる掘立柱大型建物SB9140心を配置しているが、大極殿院の設計思想とは基本的に異なるのだろうか。

設計案の解釈 等差の同心3円に1偏心円が交差する構造はキトラ古墳の天文図を思わせる。高御座心・大極殿心の関係は天の北極・これと僅かにずれる北極星を、同心3円は内規・赤道・外規をそれぞれ連想させる。また、黄道28宿から成る四神が描かれる宝幢の北列東延長部にある井戸SE7145はK2から360尺の偏心円上にあることから、偏心円は黄道で、井戸は朱雀の一部をなす星宿「東井」の表現か。設計者は大極殿院に宇宙の構造図をイメージし、設計案Bを用いて磚積擁壁等の施設を配置したのではないだろうか。

(内田和伸)